

Book Review 15-17 時代小説 # 惣十郎浮世始末

『# 惣十郎浮世始末』（木内昇著：きうちみのり、女性）を読んでみた。著者は『漂砂のうたう』で直木賞を、『櫛挽道守』で中央公論文芸賞、柴田錬三郎賞、親鸞賞を受賞する。

本書は読売新聞に連載。話は、浅草の薬種問屋で火事が起き、二つの焼死体があがったことが発端となる。謎は、誰が火をつけ、二つの焼死体は誰なのか。

定町廻り同心・服部惣十郎と二人の岡引きが事件解明に走る。探るうちに、背景に漢方医学と蘭方医学の諍いが絡んでいることが判明する。このころ江戸では天然痘が流行っており、その根絶のために闇で種痘技術の導入を試みる医師たちがいたのだ。

ここで種痘について調べてみた。種痘とは、天然痘の予防接種のことである。世界ではエドワード・ジェンナーによる牛痘法（1796年）が広まっていた。古くからアジアでは、天然痘患者の膿を健康人に接種して軽度の天然痘を起こさせて免疫を得る人痘法が行なわれていた。中国から長崎へ伝わり（1789年）、人痘法がなされた。だが数%の重症化する例もあり、安全性は充分でなかった。その後、日本各地で様々な試みがなされている。特に佐賀藩の牛痘苗を用いた試みが有名である。天然痘が各地で流行し、幕府支配地域での種痘に対する要望が増したこと、そのため幕府として種痘医の養成が急務となったこと、および江戸での急速な開化ムードも後押しし、1858年に蘭方（蘭学）解禁となった。こうして全国に広まっていくと同時に、もぐりのいい加減な施術を行う牛痘種痘法者が現れた。本書ではこのような情勢を物語に取り込んでいる。種痘は天然痘の撲滅に貢献したが、種痘後に脳炎を起こす事例が頻発し、「種痘後脳炎」と呼ばれる。本書でも、このことが物語の進行に影響している。今日ではY字型の器具（二又針）に付着させて人の上腕部に刺し、傷を付けて皮内に接種する手法が一般的である。天然痘は1980年に撲滅され、自然界に存在しないものとされているため、1976年から種痘は日本では実施されていない。

本書を読むと、江戸時代の庶民の病気に対する考えや行動を窺い知ることができる。もちろん、時代物ミステリーとして十分堪能できる作品でもある。